

松本清張記念館

◆館報◆

2024.3
第73号

「そういえば、志村さんの枕元には
俳句雑誌がいつもおいてありましたな」(医者)



「巻頭句の女」収録 駅路 傑作短編集(六)
昭和40(1965)年 新潮文庫

春を待ち人待ち布団の衿拭きぬ。

(志村さち女)



「その句をわれわれが選んでいたかと思うと、

妙に身近に感じます」(同人)

現在入手しやすい本

『駅路 傑作短編集(六)』 新潮文庫
『松本清張全集37 装飾評伝 短篇3』 文藝春秋

作品紹介

■巻頭句の女

志村さち女は俳句雑誌「蒲の穂」の投句者で、一度巻頭に選ばれたことがあった。ところが、このところ三回続けて投句がない。

主宰者の石本妻人らは、胃潰瘍で治療院「愛光園」に入所しているさち女のことを心配になり、直接見舞に行くことにした。医師の話や聞き、さち女は胃潰瘍だったが退院していた。彼女の境遇に同情した岩本英太郎という男との間に愛情が生じ、結婚するからと岩本に引き取られたというのだ。

同人の藤田青沙は「春を待ち人待ち布団の衿拭きぬ」というさち女の句から彼女に訪れた恋愛を察し、さち女は死んでいくことを恐れた。しかし家を訪ねると、彼女はすでに死んでいた。

青沙と妻人はその「短い幸福」を悼んだが、妻人はさち女が亡くなった夜、岩本の借りの家に何度も車がかかると気がなつた。調べていくと、近所では知らない医者が来ていたこと、葬儀屋も家政婦もよく分からないことなども、ある疑念を募らせた。さち女の死んだ夜に何が行われたのか？ 文芸評論家の平野謙はその完全犯罪計画が破綻した契機を、俳句が(全人的救済)(さち女)でありうることを、俳句結社の(人間的連帯)(同人)の苦難を見て見ぬふりしないということに考えている。

松本清張も戦前、朝日新聞社内の厚生俳句会に参加し、投句もしている。その句会で、俳人同士の繋がりが集まり(結社)の雰囲気などに触れたことは、この「巻頭句の女」にも生かされていることだろう。ちなみに、主人公の石本妻人は医者で「煙草が好き」との設定で、戦前から小倉で付き合いがあり、ヘビースモーカーでもつぱら外国煙草を吸っていた横山白虹を参考にしたのかもかもしれない。

(学芸担当主任 中川里志)

目次

開館25周年記念講演会について	2
第46回研究発表会について	5
開館25周年を振り返って	8
友の会活動報告	10
「松本清張研究」第25号発刊	11
トピックス	12

小説の価値と世界の黒い霧

講師・佐藤究（作家）

令和5年8月6日（日）午後2時
J・COM北九州芸術劇場小劇場
参加者152名

はじめまして。

佐藤です。暑い中ありがとうございます。

皆さんはここに来るだけでも大変だったと思うので、講演は50分ぐらいで早めに休憩して、後半30分はサブライズゲストの危険地帯ジャーナリスト・丸山ゴンザレスさんと対談してみたいと思います。今日は東京から僕の担当編集者たちにも来ていただけていますが、東京の出版業界を離れてせっかく小倉に来たので、なかなか東京では話す機会がない話をしてみたいと思います。僕ら作家のことをストーリーテラーと言いますが、我々は一体何をしているのか、自己批判、自己反省も含めて、僕もそうだし、編集者たちにもちょっと内省していただくという形でやりたいと思います。

今日は、質疑応答の時間がとれませんので、予めいただいた質問の中から幾つか講演中にお答えできたらと思います。

まず、「例えば外国の犯罪多発地域などに関



する情報は、インターネット以外に、どんな方法で取材なさっていますか」という質問ですが、これは、アジアではたぶん一番の危険地帯ジャーナリストだと思われ丸山ゴンザレスさんが、旅から帰って僕の書齋に遊びに来て、テレビでは使えないいろんな情報をバートと話してくれているんです。それが限りなく一次情報に近い、自分で見てきたことを話してくれまので、僕の取材になっていきます。その様子はまさに後半で見ただけだと思います。

もう一つ、「松本清張先生が今の世界で活躍しているとするならば、清張先生は『黒い霧』の切り口から、今現在の政治と社会情勢をどのように見て、どのような解釈で、どのような行動の視座を私たちにお示しくださいませんか」という質問です。これは結局、ご本人しかわかりませんよね。想像するしかないですけど、今日のテーマにもつながってくるので、僕はこう思いますよという話を後でするつもりです。

とにかく人間はストーリーが好き

「若い方の本離れが進んでいます。先生が十代に読んで欲しい本はなんですか」というシンプルで僕らの業界は身につまされる質問もいただきました。僕の友人だった詩人の河村悟さんは質問に答えないで、そこから別の話の流れを作っていました。僕もこの問いを同じように使わせていただきます。

本離れは、日本だけではなくて、アメリカなどでも同じみたいです。アメリカのワシントン&ジェファソン大学でストーリーテリングの構造を研究しているジョナサン・ゴットシャルが『ストーリーが世界を滅ぼす（原題：ザ・ストーリー・パラドックス）』という本を書いてい

ます。サブタイトルを直訳すると「ストーリーテリングへの愛が、いかに社会を築き、崩壊させるか」となります。この本、たぶん編集者たちが読んでひっくり返って、明日から仕事に出られないぐらいの強烈な内容だと思っただけですが、東京で何人かに印象を聞いてみたら、意外と僕が思ったほど深く読まれています。

このゴットシャルが、学生に「自分の人生の中で、大切なものに1から10まで点数をつけるとしたら、君の人生にとってストーリーには、どれぐらいポイントをあげられますか」と聞くんです。そうすると、10段階評価でストーリーは自分にとって2か3という答えがほとんどらしいですね。その後で、ストーリーにはナラティブも含まれると言っていると、最終的には自分の人生でストーリーに費やしているポイントは何と10になつてしまふ。

英語で物語は、ストーリーテリングとナラティブの二つに分けられます。ナラティブをわかりやすく言えばトークです。こういうトークもそうですし、お笑い番組で芸人さんが面白かったエピソードを30秒に圧縮して話すトークや、あるいはユーチューバー、あれは完全なナラティブですね。自分にあつたことを話して、編集していること自体がストーリーです。学生たちは、そのトークの部分が編集されたストーリーだということが認識に入っていないので、それも入れてあげる。オンライン・ゲームはナラティブではないですが、プレイヤーはゲームのデザイナーが作ったストーリーの中を回っているの、ストーリーテリングに触れています。あとは歌の世界。これらも全部ストーリーだと学生に言つて、もう一度、毎日、何時間ぐらいこのストーリーにつき合っている

か計算させたら、大体平均5時間と出るんですよ。これは相当な時間で、スポーツのトレーニングや教会でお祈りしたり、料理をする時間よりも圧倒的に多い。それくらい人はストーリーに多くの時間を費やしていて、かつその事実には気づいていない現実が、ゴットシャルのテストからわかります。

ストーリーテラーが存在するには、とにかくストーリーが好きというこの人間の前提がなければいけない。もう一つ、先ほど、佐藤先生と紹介されましたが、僕の先輩の作家たちもみんな先生と呼ばれていて、日本に限らず世界でもストーリーテラーの社会的価値がすごく高いらしいですね。『ストーリーが世界を滅ぼす』にこう書いてあります。

物語の恩恵を受けるのは聴き手だけではない。物語の語り手は私たちにたくさんものを与えてくれるが、私たちからも大きな見返りを得ている。世界中の部族のストーリーテラーが高い社会的地位を享受していることが、人類学者によって明らかにされている。例えば、オンライン学術誌『ネイチャー・コミュニケーションズ（Nature Communications）』の最近の調査によれば、フリピンの狩猟採集民アイタ族の中で、優れたストーリーテラーはさまざまな恩恵に浴している。※1

このアイタ族は狩猟採集民ですから、狩りをする人が一番偉いはずなのに、夢中になれる物語を自分たちに与えてくれる者を最大に評価している。ゴットシャルは続けてこう言います。

私たちも同じである。私たちには優れた物語へのあくなき欲求があり、その語り手に報酬を惜しまない。私たちの社会で最もあがめられ、地位の高いメンバーは、フィクションの作り手——スター級の作家、映画製作者、俳優、コメディアン、歌手だ。『フォーブス』誌による世界で最も報酬の高い有名人の

格付けに名を連ねるのは圧倒的にこのような物語の作り手たちで、スポーツ選手が後に続く。これはずいぶん奇妙なことだ。アイタ族と同様に、私たちは自分の生活を支えてくれる人々―病気を治す医師、そもそも病気にならないようにしてくれている下水道技師、社会を運営してくれている政府職員、食べ物を作ってくれている農家、私たちを守ってくれている軍人に名声や富を与えていない。それなのに、「ごっこ遊びの達人たち―いわば人前でおままごとをして人生を費やしている人々」としてもない名声と富を与えている。*2

最後の数行は我々作家にとっても痛烈です。「人前でおままごとをして人生を費やしている人々」というのは、でもこの指摘は当たっていますね。本当なんです。ここで言う「ごっこ遊び」はフィクション、つまり嘘のことです。書く側は、種も仕掛けもある嘘だとわかっている。それで先生と呼ばれるのはおかしいだろうと、だんだんこの仕事に嫌になってくるんです。松本清張先生も『日本の黒い霧』をほとんどノンフィクションで書いて、書いた背景などをいろいろ見ると、清張先生もこの嘘の話を作りに続けたことにちよっと飽き飽きしていた部分があったのではないかと思います。それにもかかわらず、人間は本当にストーリーが好きで、ストーリーテラーを祀り上げる構造が社会にあるんです。

『日本の黒い霧』を ノンフィクションで書いた理由

GHQの占領下に起きた様々な事件をノンフィクションで書いた『日本の黒い霧』は、いろんな評価と批判もあつて、「黒い霧」という言葉が当時の流行語になるほど広く読まれました。清張先生が文庫下巻に「なぜ『日本の黒い霧』を書いたのか―あとがきに代えて―」という文章を寄せているので、朗読してみます。

『日本の黒い霧』をどういう意図で書いた

か、という質問を、これまで私はたびたびから受けた。

これは、小説家の仕事として、ちよつと奇異な感じを読者に与えたのかも知れない。けれども、小説家としての松本は反米的な意図でこれを書いたのではないかと、この言葉である。これは、占領中の不思議な事件は、何もかもアメリカ占領軍の謀略であるという一律の構成で片づけているような印象を持たれているためらしい。(中略)

私はこのシリーズを書くのに、最初から反米的な意識で試みたのでは少しもない。また、当初から「占領軍の謀略」というコンパスを用いて、すべて事件を分割したのでもない。そういう印象になったのは、それぞれの事件を追及してみても、帰納的にそういう結果になったにすぎないのである。*3

『小説の価値』がどこにあるのか

ここからやつと本題になるのですが、「小説の価値」がどこにあるのか。最初に結論を言ってしまうと、本を読み終わったとき、最後に「本書はフィクションです。実在する個人、団体とは一切関係がありません」という一文があります。よくある注意書きですが、実はあれこそ「小説の価値」ではないかと最近思いはじめました。あれは、あの一文が機能するように、ものすごい歴史を積み重ねた結果で、人間の作ってきた文化の証なんです。それが何をもたらしているかというところ、「これはよくできていますか、何かを(決断)する、あるいは(行動)する基準にはなりませんよ」ということです。たぐさんの作家や読者が、フィクションが現実とは別次元で機能する状態というものを共同して作ってきた。もし、そのバリアが崩れたらどうなるのか、それは陰謀論という話につながります。陰謀論者が何をやっているのか。人間がどう動くのかを元特殊部隊員がレクチャーでこう言っていました。「まず(認識)があつて、次に(決断)があつて、それから(行動)がある」。もし、「本書はフィクションです」というストッ

パーがきかなくなってしまう場合、事実でも何でもないので「認識」して、それを「決断」の材料にして「行動」に移ってしまうということが起きるんです。

陰謀論というのは英語で「コンスピラシー」、論は「セオリー」なので直訳して陰謀論とか陰謀説と言いますが、ゴットシャルはその言い方に意義を申し立てています。セオリーという方らには、いろんな方向からの検証があつて、いろんな力を受けながら最終的にセオリーになる必要がある。しかし陰謀論はその過程を経ない。だったらコンスピラシー・ストーリー、陰謀物語と呼ぶべきじゃないかと。僕もそれに同意します。

Q アノンという陰謀論が、トランプが選挙でバイデンに負ける前の年ぐらいに、かなりアメリカで広がって日本でも問題になりました。Q アノンは、トランプの共和党支持で、対立する民主党はディープステートという悪い組織とつながっていると主張する陰謀物語です。その元になるピザゲートと呼ばれる事件がありました。2016年のアメリカ合衆国大統領選挙期間中に、民主党支持者が経営するワシントン・ピザ店が陰謀の舞台になっている、という偽情報がインターネットで広がったんですが、ピザ店を根城にする児童買春組織に民主党の幹部たちが関わっていて、地下室で何か悪いことをやっている。この根も葉もない嘘を真に受けて、実際に銃を持ってそのピザ店に押し入った若者がいます。彼はストーリーをそのまま決断の材料にして行動に移してしまつた。要するにフィクションをその行動の材料にする人間が銃を持った状態で現れたということです。

先ほどの「清張先生が、今ご存命だったら何をやっているんだらうか」という問いに立ち戻ると、僕には先生が「自宅で、あるニュースをずっと興味深そうに見ている様子が思い浮かびます。それは2021年のアメリカ合衆国連邦議会議事堂襲撃事件です。トランプがバイデンに選挙で負けて、選挙は無効で、しかも不正があつたとひたすら主張して、それを真

に受けた人たちが暴徒と化して議事堂を襲い、800人ほどが逮捕された歴史的大事件です。結果として不正の証拠は何もなかった。たとえあつたとしても、銃を持った暴徒と化した公的施設に突入していいことにはならないですね。ストーリーをそのまま受け取って、「決断」の材料にして、「行動」してしまう人が増えている。「そういうことはできませんよ」というのがフィクションの価値で、人間が長く培ってきた文化ですが、今それが崩れつつある。その理由として、本離れの質問に戻りますが、読書好きというのは、清張先生の話も含めてよくできたストーリーにずっと触れていますので、このQアノンとかピザゲートについても、ひどい話だけど何かおかしいなと思ひ、地下室での犯罪を知っているのに、なぜこの人は書くだけで通報しないのかとか疑問が出てくるのですが、初めてSNSなどを通して良くてきたストーリーに触れる人は免疫がないんですよ。そのまま信じて「行動」まで行ってしまいます。

「小説の価値」のもう一つは、小説には良くできた話、最高レベルのものがたくさんあつて、それらにいつでも触れられることです。僕も日本推理作家協会に入つて、理事をやつていますが、推協の会員がそういうわけのわからない行動に走つたとか、詐欺に引かかつたという話は聞きません。僕らも創作という意味では嘘をつき続けていて、人がついてくる嘘も割とわかるようになってきているのかもしれない。そういう意味での「小説の価値」ってあります。

ストーリーバースを交流させ、開けておく

今日、ここにトマス・ピンチョンの『V.』という本を持ってきました。陰謀物語めいた謎を追う探偵物語で、他にも筋があつて、本当にも陰謀物語以上にわけがわからない話ですが、この小説で善悪について触れているところをちよつと読みます。

それは、二つの同じサイズのベクトルがぶつかつて数値不明のXマークを作るといふものではなかった。むしろ、善は次元を欠い

た一点であって、それを取り囲むように、内
向きの矢印がずらりと並んだ図柄になる。善
が包囲されて追詰められた図。 ※ 4

という描写をしています。これ非常にすばら
しいです。片方に悪がいて、もう片方に善がい
て、それが対峙して戦うんじゃないかと、善とい
う概念が生じるとき、それは必ずホイールの中
央なんだと。自転車の車輪にたとえれば、中心
と円周はスポークでつながっているんですけど、
ピンチョンの比喩だと、そのスポークはず
べて内向きの矢印になる。唯一の善が悪に包囲
され、周りの全ての悪が善に向かっていて、構
図です。これは、陰謀ストーリーを信じて行動に
移す人が陥る思考と言えるのではないでしょ
うか。自分たち以外は全部敵になってしま
うか。自分たち以外も言ったりますが、こ
の形に陥るところ、陥らせるところがストー
リーのダークサイドの効力でもあります。

ゴットシャルは、ストーリーパス、ストー
リーの宇宙を一人一個持っているという考え
方を提案しています。まさにその通りで、僕ら
も生まれて、人と会っているんな経験や記憶し
ている固有のストーリーを持ってますよね。
全員が違うストーリーパスなんです。何故そ
れが閉じないかという、相互に交流している
から閉じないわけです。自分と相手のストー
リーパスを重ね合わせているようなイメー
ジですが、ピンチョンが言った「善とは次元を
欠いた一点」の状態になってしまおうと、そのス
トーリーパスから外に出られない。陰謀物語
を発信する人間は、その書き方も絶妙で、受け
手を外に出さないように仕掛ける。そうなっ
てはいけませんという意味でも、「本書はフィク
ションであり、実在の団体・個人とは一切関係
ありません」という一文が機能する文化的状況
には大きな価値があるんです。

小説の形式で多くのフィクションを取り入
れるからこそ、偽情報にたやすく踊らされない
精神という文化的な資産を受け取ることがで
きる。この「読書」というトレーニングをす

飛ばして、SNSでの陰謀ストーリーですね、
これはたぶん情報戦争みたいなものと言っ
てもいいんですが、そういう情報を浴びせられ
ると、簡単にだまされる人も増えてくる。

フィクションを「行動」や 「決断」の基準にしない

清張先生は「日本の黒い霧」について、米軍
の謀略ありきだったのではないかと批判に
対して、「それぞれの事件を追及してみ、帰納
的にそういう結果になったにすぎない」と反論
しています。先生の言う帰納的とは、論理的思
考法の一つですが、いくつかの事象を集めて、
そこから共通項を見出して推論を作る方法
です。清張先生はこの帰納を用いて考え、占領
下で起きた謎めいた事件のラインナップをそ
ろえていった結果、GHQの謀略というのが
見えてきただけであって、最初から結論があっ
たのではない。きちんと取材され、考えて仕事
をされているわけです。

ただ僕は、さまざまな陰謀ストーリーが現代
にはびこる原因として、この帰納的思考に問
題があるのではないかと思っただけです。その
理由は、たくさんの事例から共通項を拾い上げ
て推論を作るので、意図的に誰かがものすく
たくさんの偽情報を流したら、あとは放ってお
けばそれらを拾った人が勝手にストーリーを
作ってくれる。つまり情報操作できますよね。
陰謀ストーリーにはまる人は、自分を取り込み
たい情報しか目に入らなくなるので、どんな
閉ざされていく。論理学にはもう一つ、演繹と
いう方法があって、これは最初の大前提を元に
推論していく方法です。

たくさんの事例を結びつける帰納は、偶然
を結びつけて話を作ってしまうので問題があ
ると思っただけですが、陰謀ストーリーについ
てはどうも帰納の問題だけでもない。これはピ
ザゲート事件に立ち戻ってみるとわかります。
この犯人は、帰納的ではあるかもしれないが、
SNSを見ていて、そこから入ってくる情報を

帰納法つぼくつなげて、ピザ店に押し入って
います。本当の帰納法の行動というものは、まずこ
のピザ店に通って、普通にピザを頼んでみて、
店員の態度を見たり、常連の態度を見たり、あ
るいは周りでゴミ収集の仕事をする人たちに
も「この店をどう思う？」と聞いたり、刑事の足
を使った聞き込みのように、裏を取るために現
場に行くことが大事なんです。そうやって情報
を得るのが、本来の帰納的な論理で情報を収集
したことになる。演繹もそれは同じです。現場
に行かずして「決断」し「行動」する背景には、
安楽椅子の探偵を生んだミステリー小説の罪
も少なからずありますよね。

論理学は面白いと思って調べたら、帰納・演
繹以外に、仮説生成と訳されるアブダクション
というのがあるんです。帰納はそこにある事
象から導かれる推論しか得られない思考法で
すが、アブダクションは仮説生成ですから、集
めた事象の総和を超えた推測を可能にする方
法です。その象徴として紹介されるのは、砂漠
で魚の化石が幾つも見つかった場合で、このと
きに人間は「3億年ぐらい前はこの砂漠は海
だったんじゃないか」と推論する。実はこれ、
帰納と演繹のどちらからも絶対に出てこない
思考なんです。この能力なしに人類の文明は
なく、同時にこれは陰謀ストーリーの原因にも
なっている。我々は仮説を作る場合に気をつけ
なくてはならない。よくできた話を作りそう
になるんですよ、人間はストーリーが好きなの
で。明らかに仮説ないフィクションであるも
のを自分の「行動」、「決断」の基準にしないこ
とが大事で、その土台を作るのが「小説の価値」
ということ。今後、とんでもない仮説をそ
のまま信じる人が増えてくると思うんですよ
ね。別にその仮説に夢中になるのはいいのです
が、窓を開けておくこと、聞く耳を必ず持つよ
うにしておくことが大事だと思います。ご清聴
どうもありがとうございます。

丸山ゴンザレスさんを迎えて

講演会後半では、丸山ゴンザレスさんにご登



場いただき、佐藤先生の質問に答える形で対談
をしてくださいました。

国内外の危険地帯での取材方法や現在にお
ける犯罪組織の活動、裏事情など、実際に現地
に赴き自ら取材した「世界の黒い霧」について
語ってくださいました。

また、考古学者を目指し大学で修士号まで取
得されたことや考古学を通じて松本清張ファ
ンになった話も披露してくださいました。

※1・2 ジョナサン・ゴットシャル著、ストーリーが
世界を滅ぼす、東洋経済新聞社、2022、
p.45

※3 松本清張著、日本の黒い霧 下巻 文藝春秋、
2004、p.303

※4 トマス・ピンチョン著、V. 下巻、新潮社、
2011、p.144

松本清張研究会 第46回研究発表会

令和5年12月2日(土)
東京学芸大学 N203教室 参加者 60名

講演

研究と想像力 — 松本清張古代学の時代



講師
上野 誠
國學院大学
教授

アカデミズムとの住み分け

我々は歴史空間を生きています。歴史空間を生きていくという感覚が大事です。

私が生まれた1960年から72年までの間は、実証性の古代学の時代であったと思います。私はこの実証性の時代に住み分けが起ったと思っています。つまり、アカデミズムの世界では、律令研究を一生懸命積み上げて、古代史像を作っていく。一方で、松本清張とか黒岩重吾とかが想像力を羽搏かせて古代物の歴史小説を書いていく。そこに松本清張が果たした役割があると思うんですね。

例えば、1960年代、歴史ブームが起きます。中央公論社の『日本の歴史』という本が100万部売れました。もう一つはNHKの『日本史探訪』。そこに、まだ新進気鋭の京都大学の松本清張さん、奈良女子大学の門脇徳二先生などが出て、そこに松本清張さんがあの厚い唇で出てきて語っていくという、そういう棲み分けがおそらくなされていくんです。そして、松本清張の『火の路』などは、1972年の高松塚古墳発掘のブームによって、古代史の関心が急速に高まり、さらには日中国交回復からシルクロードブームになっていく時代に、出て

きたものだと思います。

その一つ前は敗戦です。歴史学と地理学は徹底的に戦争協力に対するバードが行われ教職追放が行われた。ところが、日本文学研究には全くその手が及ばなかった。そういう時代の中で、1945年に神田の喫茶店に新進気鋭の学者が集まります。戦前「赤い貴族」と言われウイーンに留学をした、民族学者の石田英一郎が司会をします。そこに考古学者の江上波夫先生がやってくる。そして、討論をしていくわけですが、その時に出たのが「騎馬民族征服王朝説」です。中期古墳になると馬具がたくさん出てくる。騎馬民族がやってきて王朝交代が行われたことを示している。「古事記」や『日本書紀』はそれを隠蔽しているのではないかというわけですね。これは極めて大きな影響力を持ちました。そういう時代の雰囲気、松本清張は体の中に取り込んでいきながら、戦後の著作がなされていくのです。

人の移動

松本清張の古代への関心の中で一番重要なものは、「人の移動」だと思います。人がどのよう

に動いていくかということですね。例えば、「古代史疑」の中で清張が注目するのは、生口という『魏志倭人伝』の中に出てくる言葉です。古代の倭は中国側からいろんなものをもらうわけですね。そのお返しに輸出できるものがない弱い立場の倭は、人(労働力)を出さずしない。『魏志倭人伝』には倭人は海中に没して魚介類をとるとよく出てくる。生口とはそういう

う海人の技術を持った人達のこと、移民として中国に行ったのではないかと清張は書くわけです。

これは、「人の移動」に対して極めて敏感な人の発想です。「点と線」にも、交通機関を乗り継いでどういうふうになるか、人の移動は一つは、軍隊経験から来るのだと思います。太平洋戦争は、日本から船に乗ってどこかに行つて戦うのです。もう一つは、朝鮮半島から多くの人たちが九州地域の炭鉱労働者としてやってきた。その人たちの生活を清張はおそらく小倉で見ているんですね。

太平洋戦争の後に朝鮮戦争が勃発すると、九州地域が最前線の基地になるわけですね。これが作品化されたものが「黒地の絵」です。小倉に移動してきた250名もの黒人を中心とした兵隊が脱走する、略奪をする、それが鎮圧される。その中で、妻を犯された男がその復讐を計画する。男は朝鮮半島から死んで帰ってくる遺体の処理をする仕事を得て、刺青によって犯人だと分かった兵隊の肉体を切り裂く。そこで終わる小説です。

部隊がどこに派遣されるのか、その移動が気になる感覚が、実は1960年福岡県朝倉生まれ、福岡市南区育ちの私などには、まだ若干あるんですよ。例えば、おふくろが語るのを聞いたのです。「前はくさ。大刀洗飛行場ちゅうとがあったやろが。特攻隊出てたやろ」「特攻に行くと前の兵隊が街に溢れてたらね。金払わんで酒飲むやつ、農家の家に入って娘さんに変なことをするやつ、そうかと思えば、お寺に行つて座禅を組むやつが出てくる」。

まだ私が子供の頃、春日原と志賀島にはキャンプがあったのですよ。そうするとね、こんな話になる。「今度さあ、春日原に来た部隊は、この後はベトナムに行くよ。ベトナムに行つたら帰られんかもしれんよ」。

大人たちはどこから移動してきた部隊がどこに行くかという「人の移動」にも、ものすごい関心を持っているのです。そして、荒くれものが

多いかジェントルマンばかりか様子見をするんですよ。最初は、夜7時以降は女子供は外に出たらいかんと言われるが、しばらくすると、いや、いい部隊みたいよとそこから交流が始まるわけですね。

博多に石堂川という川があるんですね。そこに千代町という町があります。で、1970年代まで千代町はどういう構造を持っていたかという、川に杭を立て張り出して家を建てていた。簡単にいうと川を不法占拠して住居にしていたのです。それが、ずーっと何百メートルも続いているわけです。その石堂川を私たち家族で通ったとき、父親がこういう物の言い方するんですよ。「ああこんなところに、もう、バラックの張り出したものを立ててねえ、もう見場が悪い、もう早よ撤去せなかん」すると、母親が言うんです。「それんこと言うてもねえ、あの人たちはね、帰るに帰れんよ」。

日本は、炭鉱労働とかで大量の人を朝鮮半島から受入れているわけですね。戦争が終わって、帰りたい人はみんな福岡で船待ちをしてるわけですよ。その間に朝鮮動乱が起こり、様子を見ている間にそこに大量の人が滞留して行く。そして、最後に残った人達がずっとそのバラックの中に住むという状況ができてしまつたわけですね。前の父親と母親の話のように、これに対してバランス感覚持ってるんですね。これが一つの歴史的な感覚なんですね。

「黒地の絵」などが持っている、明日戦場に行つて最前線に送られる兵士たちの心情とかも、千代町の動くに動けない人の心情と同じ歴史的な感覚だと思ふ。清張の『古代史疑』とか「黒地の絵」などを読むと、この「人の移動」が理解できます。

北部九州的な歴史的感覚

大宰府政庁跡の前に「水城」という堤防がある。これは敵を水攻めにする所で、「大野城」が軍隊の駐屯地です。そこから古代道路がまっすぐ行つて、筑紫館「鴻臚館」があるわけですね。鴻臚館は、遣新羅使や遣唐使の寄港地にもなる

松本清張と中上健次

犯罪・差別・天皇制



講師
大井田 義彰
東京学芸大学
名誉教授

松本清張と中上健次の死

松本清張は1992(平成4)年の8月4日、中上健次は8月12日、ほぼ同時に亡くなっています。清張の方は享年82歳、対して中上健次の方は46歳の若さの唐突な病死でした。二人の間に、世代の差やジャンルや出身地などの違いのためか、深い交流はなかったようです。しかし、清張と中上には、作家になるまでの恵まれぬ生活環境や学歴の問題など、かなり似た所もあります。二人の文学を素直に並べてみると、共通の問題点が見えてきます。「犯罪と差別と天皇制」の問題です。

は尋常高等小学校卒業の学歴のために、若き日様々な差別を受けて苦勞を重ねました。そのため清張はあらゆる差別に敏感でした。「砂の器」のハンセン病差別、「黒地の絵」の人種差別などが挙げられます。中上と関係の深い部落差別の問題についても発言や小説を残しています。

例えば、『昭和史発掘』に収められた、「北原二等卒の直訴」もその一つです。この作品は昭和2年に実際に起こった天皇直訴事件を扱ったものです。北原泰作という部落解放運動の闘士が昭和天皇への直訴に及ぶまでの経過を克明にたどったものです。清張は最後に、「旧軍隊の部落出身者に対する差別は、そのまま現在の自衛隊にも、まだ残されている部分がある。」と、昭和38年の陸上自衛隊第37普通科連隊での差別事件を例示して付け足しています。清張の過去は常に現在の批評、問いかけになっているのです。これこそが、清張の歴史小説を特徴づける最大のものだと思います。

清張はほぼ同時期、『現代日本の差別』という新書の巻頭に、「現代社会と差別」と題する講演記録を寄せています。そこで、部落差別の歴史的背景を説明し、その不合理性を解説した後、大方次のように語っていました。結局、部落差別は近世に入って捏造されたものにすぎないが、根が深くして一筋縄では解消できない。また、組合活動に組み込むこともできないから孤立しがちな問題である。だから、根気よくその不当性、そのしからざる所以を一般の人たちに説き、訴え、教えていかなければならない。と。今読むと、極めてシンプルな結論ですが、そこがまた清張の誠実さで大人の所だと思えます。

清張文学と犯罪の深い関係については今更言うまでもないことですが、中上文学もやはり犯罪とは無縁ではありません。初の芥川賞候補作『十九歳の地図』は、いたずら電話を繰り返したあげくに最終的に東京駅に爆破予告の電話をかける、鬱屈した青春、青年を描いた小説です。その後のどの小説にも犯罪が溢れかえっています。「枯木灘」は腹違いの弟殺しの話です。「地の果て 至上の時」は父親殺しの話です。奥泉光と法月綸太郎による『探偵小説』として読む中上文学」という対談がありますが、中上文学は推理探偵小説と親和性が高いようです。

差別

中上文学の核である差別の問題は、清張文学では学歴差別の問題が対応しています。清張

天皇制

犯罪と差別に続く三つ目の、天皇制の問題もここまで来れば、最早一続きです。

振るのです。我が振る袖をなめし(無礼だ)とは思わないでくださいね。

「右、大宰帥大伴卿、大納言を兼任し」これね、任命されても兼任して平城京に帰った時に職が解かれるんですね。「京に向かひて道に上る。この日に馬を水城に駐めて」水城は大宰府の北の出入口で、平和な時にはここで宴会をやつて、「府家を顧み望む」大宰府の家々を顧みて、「ここに卿を送る府吏の中に、ここに大宰帥大伴卿を送る府吏のうちに、「遊行女婦あり」これでの女性が遊び女であることが分かるわけです。「この字を児島と日ふ。ここに、娘子の別れの易きことを傷み、その会ひの難きことを嘆き、涕を拭ひて自ら袖を振る歌を吟ふ。」と出てくるわけですね。

大宰府の北の入口が水城で、ここまで来て馬を止めているわけです。こういうところに歴史的な感覚を磨かなきゃいかんと思うんですよ。十三世紀の元寇の時代になつても、元軍は博多湾から上陸してこないんですよ。理由は簡単です。軍事防衛ラインは陸の奥にあるんです。そこまで歩かせて消耗させて、なおかつ物資の補給がうまくいかなないようにして、そして、積み撃ちをするわけです。

最後に、大納言大伴卿の和ふる歌二首です。
大和道の 吉備の児島を 過ぎて行
かば 筑紫の児島 思ほえむかも
これから私は、現在の岡山県の児島に行くけど、そこを通るけど、その時には君のことを思い出すよ。

ますらをと 思へる我や 水茎の
水城の上に 涙拭はむ
立派な男だと思っている私は、水茎の、これは水城にかかる枕詞で、水城の上に涙を拭はむ。
平和な時には、軍事施設の水城の上で遊女を呼んで別れの宴を行なつて出発していく。その時の宴歌であるから、振りたい袖を今日は振れないので、歌うし、私が袖を振つても無礼だとは思わないでくださいというふう

に歌うのです。

し、外国使節が来た時はここで一旦待機させて、伝染病などを監視するわけです。唐亭は唐の船が停まる所。さらに、回り込んだ所に唐津がある。また金印の出た志賀島が博多湾の防衛拠点になっています。だから、最後の最後まで志賀島に米軍キャンプが残るわけですね。

さらに、「夷守」っていう所があるんですよ。これが、万葉集に出てくる夷守の駅なんです。「ひなもり」という言葉は「魏志倭人伝」の中に「卑奴母離」とあります。香椎宮の後ろに夷守がある。香椎宮は実は神功皇后を祀る廟です。ほぼ八世紀代は、ここを通過して、北九州側、豊前側に出ていくという感覚がある。人、物、金をつなく道で、時には歌垣などのイベントも行われる、古代の官道です。この道が大宰府政庁までまっすぐ伸びていて、水城に守られている。

冬十二月大宰帥大伴卿の京に上る時に、娘子が作る歌二首

その水城で歌われた万葉歌に、大宰帥である大伴卿が大納言となつて京都に上るときに、土地の乙女が作った歌があります。

凡ならば かもかもせむを 恐みと
振りたき袖を 忍びてあるかも

「かもかも」というのは、普通「ああもしようこうもしよう」ということです。昔の万葉集の先生だったら、「君たちな、かもかも、ああもしようこうもしようって言うた時にはな、相手の人に対して抱きつくとか、頬擦りするとかな、そういうイメージを考えなきゃいかんよ」と講義してくれました。昔の先生は偉かったね。「ああもしようこうもしよう」っていうのは、「酒をすすめるだけじゃないんよ」と教えてくれた。

で、あなたは「大納言」として平城京にお帰りになるお方。私とあなたは馴染みの仲ではあるけれども、恐れ多いと私は袖を振りたいのを我慢しているの、ごさいます。

大和道は 雲隠りたり 然れども
我が振る袖を なめしと思ふな
これから平城京に向かう。大和道は雲で見えないのであります。しかし私は一生懸命袖を

清張は先の講演で、美智子妃の出産ニュースをメディアが派手に報道するのに触れて、何だか戦前の宮廷記事を読まされておられるようにだと批判し、「生まれながらにしてそういう身分の人があるということは、また別の方に生まれながらにして卑しい人間がおるといって階級制度が厳然として残っているからだ」と語っています。ここに清張の天皇観が出ています。

中上の天皇観と比較する必要上、清張の天皇制論とも言われる小説「象徴の設計」を見ておきたいと思えます。「北原二等卒の直訴」が発表される三年前、昭和37年から38年にかけて「文芸」に発表された小説です。

「象徴の設計」は、1878(明治11)年8月に近衛砲兵大隊の兵士らが一斉蜂起した、竹橋事件から始まります。この反乱に衝撃を受けた山県有朋は、陸軍卿として当時執筆中であった「軍人訓戒」の中の「第1に忠実。第2に勇敢。第3に服従」という徳目だけでは不十分だと気づかれます。彼は、天皇を精神的支柱とする軍隊を作らなくてはいけないと思いつつです。そして、1882(明治15)年に、天皇が統帥権を保持することを明確に定めた「軍人勅諭」を完成させます。清張が描いたのは、明治初年代にはまだ人間であった天皇が、山県有朋らによって神に変えられていく歴史の一齣であり、近代天皇制そのものの空虚さなのだと思えます。

では、清張よりも40年以上遅れて生まれてき



た中上健次にとつて、天皇制は一体どのようなものだったのでしょうか。それを確認するために、中上健次の文学的生涯を辿っておきます。

中上は、敗戦直後の1946(昭和21)年、紀州、和歌山県新宮市のかなり複雑な家庭に生を受けてます。小中高とその家で育ち、19歳の時に上京します。中上は結局大学へは行かず、肉体労働に従事しながら文学修業を続け、1976(昭和51)年、30歳の時に「岬」で芥川賞を受賞します。当時、初の戦後生まれの芥川賞受賞作家の誕生と騒がれました。その後、1977(昭和52)年に「枯木灘」を発表し、毎日出版文化賞及び芸術選奨新人賞を受賞しました。そして、犯罪・差別・天皇制との関係で言えば、1983(昭和58)年の「地の果て 至上の時」を挙げなくてはなりません。「岬」「枯木灘」「地の果て 至上の時」は竹原秋幸という青年が主人公で「秋幸三部作」と呼ばれ、彼の差別と天皇についての思いを詰め込んだ中上文学の中核です。

竹原秋幸は母フサと浜村龍造の子なのですが、龍造もフサもその後別に家庭を持ったために、入り組んだ人間関係の中で生きることを強いられます。そして、これらの物語の中心に位置づけられるのが、実は伝説的人物の浜村孫一から、その血を引くと自身の血筋を捏造している浜村龍造、それから秋幸に行き着くこのラインです。「岬」は、三人の女を同時に孕ませて自分を捨てた実父龍造に復讐するため、秋幸が腹違いの妹さと子を犯す話です。「枯木灘」はその二年後、26歳になった秋幸が、「路地の天皇」と呼ばれている実父龍造への複雑な思いから、突発的に異母弟の秀雄を殴り殺してしまう話です。

どちらの話でも、「路地の天皇」龍造の存在感に圧倒的です。しかしそれから三年後、出所した29歳の秋幸を描いた「地の果て 至上の時」では、少し様相が変わってきます。高度経済成長で紀州でも土地改造ブームが起きています。秋幸の心の拠り所でもまた苦悩の根源でもあった「路地」は更地にされてしまいます。彼は仕方なく材木商を営む実父龍造のもとで働き始めます。そして最終的な復讐、つまり、父親殺しを企

てるわけですが、そんなやさしさに、龍造は仕事帰りの秋幸の目の前で、影のような姿で、突然、首を吊って自死を遂げてしまいます。「違う」秋幸は一つの言葉しか知らないように叫びます。果たして龍造はなぜ死ななくてはならなかったのでしょうか。僕は、龍造の被差別民としての過去を重視して読みたいと思います。幼き日、浜村龍造は祖父とともに有馬の小屋に住んでいました。六歳の頃、有馬の街道筋にある鍛冶屋で馬の蹄鉄を盗んだと、有馬の者から寄つてたかつて殴られたのです。二人は乞食同然の暮らしぶりでした。幼き日のこのような体験が、実は龍造をここまで突き動かしてきたのです。

清張と並べて見ますと、僕はこの場面に野村芳太郎監督の清張映画「砂の器」の一場面、本浦千代吉と秀夫親子が村を追われ、お遍路姿で海辺をさまようあの有名な場面を重ね合わせて読みたくなってきます。本浦秀夫はこの後和賀英良と名前を変えて、著名な作曲家へと上り詰めていく。皆に陰口を叩かれながらも「路地の天皇」龍造を作り上げたのも、また、こうした差別と極貧に苦しめられた日々だったのです。おそらく自らの血への怨念は、秋幸以上に龍造の方が強かつたはずですが、しかしそれが彼の自殺とどう繋がるのかは不明です。

しかし、秋幸が叫んだ「違う」の意味は分かる気がします。秋幸は龍造の自殺によって父親殺しの悲願を永遠に果たせなくなってしまったわけです。それに対しての違和感と不満は、龍造を殺しても、秋幸は本当に満足はできなかったでしょう。もはや「路地」はなく、時代が大きく移り変わっていたからです。「路地の天皇」としてあれほどの存在感を示していた龍造も単なる一人の父親に成り下がっていたのです。

中上が「朝日新聞和歌山版」で部落出身者であることを公式に表明したのは、「地の果て 至上の時」を世に問う二年前の1981年1月でした。80年代といえば、ポストモダンとか歴史の終焉だとか、こういった言葉が飛び交い始めた時期でした。従来の常識や価値観が大きく揺らぎだし、近代が根底から問い直され始め

た時期です。部落差別と天皇制の問題もその一つで、おそらくそういう時代だから中上もカミングアウトできたのではないかと僕は思っています。中上は秋幸物語を書き継ぐ中で、「路地」も打倒すべき父「路地の天皇」も、大きく変質してしまつたことに気づかされたのです。

中上が自己の出自を公にした一年後、「朝日ジャーナル」誌上で、安岡章太郎と水上勉と「人間の「根」に踏み込む」と題する鼎談を行なつて、次のような考え方を披露しています。

「我々は簡単に、天皇が上にあり被差別部落が下にあるという形で、差別の構造を考えがちですが、ひよつとするとそれはまやかしてはいかと思ふんです。インドには天皇はない。だが賤民が存する。そういう形で考えると、あるものが解けてくるんじゃないかという感じがする。いつてみれば、天皇ということによって何か別のことを言つてたんじゃないか、という部分が出てくる。それが何のことか、まだわからないけど……」

結局「差別」というのは、単に一地域、一国家だけの問題でもないし、仮に我が国の「天皇制」が効果を持たなくなつたとしても、差別の構造は永遠に残り続けるということを言っているのだと思えます。これが、中上の差別と天皇制についての基本的な考え方で、改めて清張のそれと比較してみますと、その違いに驚かざるをえません。清張と中上は立場こそまさしく正反対です。しかし、清張も中上も共に差別と天皇制に挑み、それぞれの形で問題の根の深さを告発し、社会への問題提起を行ったという意味で、中上もまた数多い清張文学の後継者の一人に加えてもよいのではないかと、思つてしまうのです。清張が外側から糾弾していた社会矛盾を、中上は内側から破砕しようと試みていた、と捉えられるのではないのでしょうか。

最後に、清張と中上がほぼ時を同じくして亡くなった1992(平成4)年という年は、二人の死によってそれ以前あった純文学と大衆文学の垣根が従来よりも一歩近づいた、僕らの感覚ではそういう年であつたような気がします。

2023 松本清張記念館

松本清張
「砂の器」
国際シンポジウム

6/24



開館

25周年

2023年に松本清張記念館は開館25周年を迎えました。企画展や講演会などの主催事業のほか、他の部署や団体など、様々なイベントにご協力させていただきました。開館25周年の取り組みをご紹介します。

桜の宴

小倉昭和館

4/1



第3回「点と線」
香椎桜まつり

香椎にぎわいづくりの会

3/25



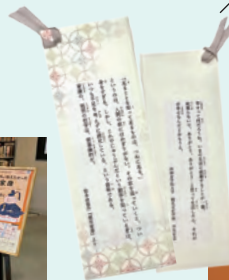
ミニ企画展

松本清張が君たちに伝えたかった徳川家康

北九州市立松本清張記念館2階オープンスペースにおいてミニ企画展「松本清張が君たちに伝えたかった徳川家康」を開催しました。清張が青少年向けに書いた家康の伝記を紹介し、その他の作品で描いた家康像との比較などを交え、著作を展示しました。

7/20 ▶ 12/17

※11月5日(日)までの予定を延長



西南女学院大学観光文化科の学生有志による「清張さんからのメッセージカード」が大人気！作品の一部を抜き出して解説をつけた葉状のカードを学生が制作し、展示の一角に置いて無料配布したところ、大変な人気となりました。また、学生の一人が、イラストの家康と一緒に撮影ができるARアプリ「兜をかぶって家康と撮影しよう!」を手がけました。

清張 福岡紀行



松本清張記念館では、市制60周年松本清張記念館開館25周年記念特別企画展「清張福岡紀行」を開催しました。

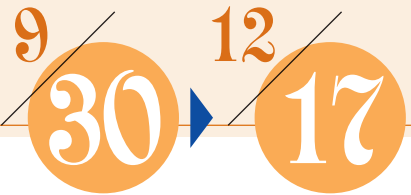
小説のリアリティを大切に清張にとって、およそ40年の前半生を過ごし、土地勘のある福岡県は小説の舞台の宝庫でした。「清張福岡紀行」展は、福岡県が登場する清張作品を文章でたどり、作品の背景やそれらの舞台がどのような変化を遂げているかを、6部構成でご紹介しました。

館内のカフェとのコラボや、Instagramキャンペーンなども行いました。



構成

1. 北九州「時間の習俗」「黒地の絵」など
2. 筑豊「火の記憶」「遠くからの声」など
3. 福岡「点と線」「渡された場面」など
4. 筑後「恐喝者」「秀頼走路」など
5. 森鷗外を訪ねて「或る『小倉日記』伝」「両像・森鷗外」など
6. 自伝的作品「半生の記」「骨壺の風景」など



11
10,11,17
ドラマ
上映会

会場：戸畑図書館

世界遺産ミステリー
小説リリース記念
新川帆立
トークショー



北九州市企画調整局

7
29
音楽×演劇×文学

松本清張
(本人ではない)
講演会

音楽：浦野さやか
脚本・演出：泊篤志



11
29

ファン北トークライブ

西日本新聞社

北九州国際映画祭
みうらじゅんセレクション
松本清張作品
上映会

北九州市国際映画祭
実行委員会

12
15



京都芸術大学
収穫祭

10



14

開館25周年
記念講演会
「小説の価値と
世界の黒い霧」

8
6



● 清張サロン(第1回)

日 時 令和5年10月28日(土)
14:00~15:30
会 場 松本清張記念館 会議室
(22名参加)
テーマ 「清張福岡紀行」
講 師 小野 芳美
(松本清張記念館 学芸員)

松本清張記念館で開催(9/30~12/17)されていた特別企画展「清張福岡紀行」のコンセプトや見どころを、担当の小野学芸員が詳しく解説した後、一緒に企画展会場を見学しました。

参加者からは「分かりやすい解説を聞いてから実際に見学することで、企画展の内容をより深く理解することができた。参加して良かった。」との声をいただくなど、大変好評でした。



小野学芸員



● 友の会 会員更新と新規会員募集のお知らせ ●

松本清張記念館友の会は、8月1日から翌7月31日までを1年間として、多彩な事業を実施しております。年会費は3,000円です。皆様のご入会をお待ちしております。

友の会入会のお申し込みは、
松本清張記念館友の会事務局まで

TEL. 093-582-2761



● 松本清張「生誕祭」

日 時 令和5年12月24日(日) 14:00~16:00
会 場 松本清張記念館 企画展示室(38名参加)
内 容 ●開会・主催者挨拶
●来賓挨拶(松本張秀氏、武内和久北九州市長)
●講演「松本清張2023」(友の会 加島会長)
●オカリナ演奏会(松本清張記念館 古賀館長) 茶話会

友の会では、清張さんの誕生日(1909年12月21日)をお祝いする「生誕祭」を毎年開催しています。生誕114年となる今年は、20回目の開催を記念して、清張さんのお孫さんにあたる「松本張秀さん」と「陽子さん」ご夫妻を特別ゲストにお迎えし、武内北九州市長にも出席いただきました。

張秀さんからは「自分の名前は清張につけてもらった。祖父は怖いイメージもたれていたようだが、幼いころよく散歩に連れて行ってもらった。すごくわががてもらった記憶がある。」など、清張さんとの思い出を公の場で初めて語っていただきました。また、武内市長は「松本清張記念館は、今年で開館25周年を迎えた。これもひとえに大変貴重な資料をご寄贈いただいた松本家のご協力と友の会の皆様のご支援のおかげである。今後も北九州市が誇る清張先生の功績をこの記念館が中心となって語り継いでいく。」と挨拶されました。

加島会長の「松本清張2023」と題した講演では、1年間の出来事を清張作品と関連づけて紹介し、パースデーケーキセレモニー、古賀館長によるオカリナ演奏会・茶話会と和やかな雰囲気の中で生誕祭が行われました。

参加者からは「お孫さんの思い出話を聞いて清張さんがこの場にいるような気持ちになった。」「お孫さんご夫妻と直接お話ができてとても嬉しかった。」「加島会長による1年間の出来事を清張と紐づけた講演が大変興味深かった。」「館長のオカリナ演奏が素敵でした。オカリナをBGMに和気あいあいとした雰囲気できれいでも楽しい時間を過ごせた。」などの声をいただきました。皆様の心に残る生誕祭となったのではないかと思います。



武内北九州市長



松本張秀さん

第27回 松本清張研究奨励事業募集

募集要項

- 対 象 ① 松本清張の作品や人物を研究する活動
② 松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンルは問いません。ただし、未発表に限り。個人又は団体も可。
- 内 容 入選者(団体)に100万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(全て様式は自由。ただし日本語)を令和7年3月31日までに応募してください。

詳しくは、ホームページをご覧ください。記念館までお問い合わせください。



研究誌「松本清張研究」〜第二十五号発刊〜

特集 清張と詩 — 詩・俳句・万葉歌

対談

松本清張の詩

穂村 弘・田島安江
司会 田中光子

論文

松本清張「表象詩人」における詩の創作と読書の記憶

小説『ゼロの焦点』における詩の機能

清張小説のなかの俳句

松本清張「たづたづし」における万葉歌の位相

清張トラベルミステリーの万葉集

久保田裕子
尹 芷 汐
綾目広治
尾崎名津子
古橋信孝

資料

松本清張 詩・俳句・万葉集 関連作品目録

特別寄稿

資料紹介 中島利一郎宛松本清張書簡

『北の詩人』と冷戦政治

——一九六〇年代初頭の韓国での受容と玄海灘論戦を中心に

幻しの肖像画

松本常彦
李 奉 範
渡辺直紀・訳
藤井康栄

投稿

「北の詩人」を取り巻いた人々 —— 元老文人訪問の記録から

鴻農映二

記念館研究ノート

横山白虹と松本清張

——「眼の壁」「巻頭句の女」「時間の習俗」の俳句を中心に

松本清張の詩心と播盤の風景

小野芳美
中川里志



令和6年度
中学生・高校生

読書感想文コンクール

若年層に清張作品に親しんでもらうとともに、表現力を学び、豊かな心を育む契機となればという思いから始めました。

新時代を切り開く若者達へ、探求の人・松本清張の精神の伝達を働きかけるものです。

- 応募対象 全国の中中学生・高校生
- 課題図書 中学生・高校生ともに下記から一作品

- 「遠い接近」(『遠い接近』文春文庫)
- 「共犯者」(『共犯者』新潮文庫、
『松本清張傑作短篇コレクション(中)』文春文庫)
- 「左の腕」(『佐渡流人行』新潮文庫)

- 応募方法
中学生、高校生ともに1,200～2,000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。
手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし全体の字数がわかるよう応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
原稿は自作で未発表のものに限ります。なお応募用紙はお返しいたしませんので、必要な人はコピーをおとりください。

- 応募の注意
・参考にした文献や出典を明記し、引用文は「 」で囲むなどわかるように表記してください。
・AIによる生成物を自己の成果物として応募・提出することは不適切または不正な行為です。
※詳しくは文部科学省「初等中等教育段階における生成AIの利用に関する暫定的なガイドライン」をご参照ください。
https://www.mext.go.jp/content/20230710-mxt_shuukyoo02-000030823_003.pdf

- 応募締切 令和6年9月30日(月) ※当日消印有効
- 選考 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

- 発表
最優秀賞、優秀賞の受賞者には、11月中旬頃、本人と学校に通知し後日表彰式を行います。なお、入選の結果は、当館発行の「館報」およびHPで発表します。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

- 賞品 (受賞人数等変更の場合もあります。)

- 最優秀賞(1名)
- 優秀賞(中学の部…1名)(高校の部…1名)
- 佳作(中学の部…3名)(高校の部…3名)
- ※最優秀賞は中学の部、高校の部で各1回ずつの受賞と限らせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。すでに受賞した人からの応募作品が賞に該当する場合は〈特別賞〉として当館発行の「館報」掲載を予定しています。

● 応募先・問い合わせ ●
松本清張記念館 読書感想文コンクール係
※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

講演に行ってきました

1	10月 11日	二島市民センター
2	10月 14日	松本清張記念館
3	10月 17日	葛原市民センター
4	10月 20日	エアステーションヒビキスタジオ
5	10月 22日	北九州市立美術館 別館
6	10月 25日	北九州市立生涯学習総合センター
7	11月 8日	パークサイドビル
8	11月 16日	青葉市民センター
9	11月 21日	若松中央市民センター
10	11月 22日	若松市民会館
11	11月 29日	松本清張記念館
12	11月 29日	舞ヶ丘中央会館
13	12月 7日	松本清張記念館
14	12月 15日	城野市民センター
15	12月 16日	東京都立大学(オンライン講座)
16	1月 13日	若松中央市民センター
17	1月 20日	レインボープラザ
18	2月 21日	(一社)北九州銀行協会
19	3月 1日	修多羅市民センター
20	3月 4日	若園市民センター
21	3月 17日	戸畑図書館

朗読・ミュージック・おしゃべりサロン

記念館に気軽に足を運んでいただき、清張の「人と作品」にふれていただく新たな試みとして、令和5年7月から、毎月1回、当館館長と地域の音楽家や朗読家など、有志による「おしゃべりサロン」が、SEICHOカフェにて開催されました。

清張の作品や生き様に関連づけた楽曲の演奏や歌唱、朗読などを聴きながら、自由におしゃべりしていただき、交流を深める場としてたくさんの方が参加されました。



●編集後記●

開館25周年を迎えた昨年は、地域の皆さまと連携し、様々な取り組みを行いました。

来館者はじめ、ご協力いただいた関係者の皆さまのおかげです。ありがとうございました。

今年の講演会は、8月10日に映画研究家の春日太一先生に「松本清張に挑んだ脚本家・橋本忍」と題してご講演いただく予定です。内容は、館報でもお伝えします。

また、特別企画展「松本清張と井上靖-新進作家と目標の星(仮)」を秋に開催する予定です。

どうぞ記念館に足をお運びいただき、両作家の意外な共通点と交流にふれてみてください。(T.O)



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
<https://www.seicho-mm.jp>
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 毎週月曜日(休日の場合は翌日)、年末年始(12/29～1/3)、館内整理日
- 観覧料 一般/600円(480円) 中・高生/360円(280円) 小学生/240円(190円) ※()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分 小倉駅からバスをご利用いただく便利です(小倉城・松本清張記念館前下車) 車: 北九州都市高速 大手町ランプより5分

